

「伝えたい!」「聞きたい!」交流したくなる授業づくり

—交流後のプラスワン活動の工夫で聞く力をアップ—

みどり市立大間々東小学校

- 主 題 自分の考えをより深めたり広めたりする児童の育成
—交流後のプラスワン活動の工夫を通して—
- 校 長 齋藤 守正
- 児童数 441名
- 学級数 17学級
- 執筆者 教諭 大澤 久美子
- 住 所 〒376-0101 みどり市大間々町大間々456-1
- 電 話 0277-73-1733
- U R L <http://midori-school.ed.jp/o-higashi/>
- 支 部 みどり市教育研究所



1 主題設定の理由

平成28年に出された中央教育審議会の答申では、言語活動の例として、伝達する、説明する、論述する、伝え合うといった活動が取り上げられている。また、平成29年に告示された「小学校学習指導要領」では、児童の思考力・判断力・表現力を育む観点から、言語活動を充実させ言語に関する能力の育成を図ることが示されている。さらに、児童を取り巻く環境を見ると、スマートフォンや通信型ゲーム機のような通信手段は急激な変化を遂げている。それらの利用により、相手と向かい合って言語を通じてコミュニケーションを図る必要性を感じづらくなってきている。

本校の児童についても、教師や友達の投げかけに対する反応が薄く、困ったことに直面したときに自分から質問をして解決しようとする様子が見られない。また、伝えたいことや伝えなければならないことがある場面でも、書く・話すなどの表現方法が分からず、自分の思いを伝える力が身に付いていない様子が見られる。さらに、教師や友達の話を聞く場面では、他者の考えを聞くよさを感じ取れず、聞く力が十分備わっていないこと

も課題である。

そこで、本校は、自分の思いや考えを伝えたり、相手の思いや考えを受け取ったりする交流活動に関わる工夫を行うことで、他者と協力して解決しようとする意欲を高め、他者と関わりながら自分の考えをより深めたり広めたりする児童が育成できると考え、本主題を設定した。

2 実践のねらいと教師の思い

(1) 全員参加の授業づくり

「交流活動を工夫する以前に、まず、児童全員を授業に参加させたい!」という教師の思いのもと、ハンドサインや付箋紙などを用いて表現する場の工夫を通して、主体的に交流する児童の育成を目指す。

(2) 伝える力の育成

「自分の言葉で相手に伝えるよさを実感させたい!」という教師の思いのもと、交流活動の工夫を通して、交流する楽しさやよさを感じて自分の思いを伝える力を身に付けた児童の育成を目指す。

(3) 聞く力の育成

「伝えて、聞いて、自分の学びにつなげさ

せたい！」という教師の思いのもと、交流活動後のプラスワン活動の工夫を通して、友達と自分の考えを比べて聞く力を身に付けた児童の育成を目指す。

これら、(1)～(3)の実践を通して、友達と相互交流をしながら、自分の考えをより深めたり広めたりできる児童の育成を目指す。

3 実践の内容

各教科担任がそれぞれに取り組んできた実践を紹介し合い、授業の流れとしてまとめたものが図1である。本実践のキーワードである「伝える力」「聞く力」「交流活動」「プラスワン活動」が1単位時間の中にどのように位置付けられるか分かるようにした。また、その具体的な実践を以下に紹介する。



図1 1単位時間の授業の流れ

(1) 全員参加の授業づくり

ハンドサインの徹底

語彙の習得量が少ない低学年の児童や発表することに抵抗がある児童でも、自分の思いや考えを表せるようにと考案したのがハンド

サインである。ハンドサインが定着してくると、よく聞こうとする児童の姿が見られようになり、問いかけに対する反応も早くなっていった（図2）。また、全校共通のハンドサイン（図3）を徹底したことで、児童が迷わずどの授業でもサインできるようになった。



図2 ハンドサインを出す児童



図3 全校共通のハンドサイン

付箋紙の活用

3年生の国語では、主人公の心情を色で表すために、白色の付箋紙を塗る活動を取り入れた。例えば、悲しい心情を青色で表し、期待と寂しさの心情を黄色と水色を混ぜた色で表すなど、児童の人数分だけ色が塗られた付箋紙が黒板に貼られた（次頁図4）。心情を表す言葉を思い付くことが困難な児童も、進んで活動に取り組んでいた。その色にした理由を伝え合う場面では、友達が同じ考えをもって安心したり、違う色にした友達の考えに興味をもって聞いたりする児童の姿が見られた。それぞれのよさや違いを感じさせた

い場面で有効であることが分かった。

これまでも、付箋紙を活用した取組はあったが、白い付箋紙を活用して、児童の表現を引き出す取組は、新しい試みであった。



図4 主人公の心情を色で表した付箋紙

(2) 伝える力の育成 (交流前や交流中の工夫)

伝える(聞く)視点や交流条件の設定

授業に交流活動を取り入れたものの、教師から与えられたマニュアル通りに進めたり、伝えやすい友達同士での交流にとどまったりする様子が見られた。そこで、伝える(聞く)視点を児童に提示したり、交流の条件を設けたりすることで、目的をもって活発に交流させる工夫が必要であると考えた。

4年生の国語では、感想文を友達と伝え合い、そのお礼としてサインやコメントを記入する活動を取り入れた(図5)。その際に、「自分とは違う感想を書いた友達に伝えよう」と示した。児童からは、「いい感想だね」「わたしは気付かなかったけれど、すごいね」など、称賛する声が聞こえてきた。友達に褒められると、更に伝えたいという気持ちが高まり、たくさんの友達と伝え合う様子が見られた。その後も、「異性と」「○人と」「考えが同じ(違う)友達と」のように、条件を毎回変え、交流相手が固定しないように工夫をした。この活動を通して、いろいろな考えに触れるよさに気づき、誰とでも伝え合える児童が増えてきた。



図5 コメントを記入し合う児童

モデルやフォーマットの提示

情報を得たり、考えを主張したりするためには、情報収集や質問をしなければならない。しかし、それは、教師が思っている以上に、児童にとっては難しいことである。そこで、よりよい方法を事前に知らせ、その疑似体験を重ねていけば、伝えることに慣れていき、聞きたいときや思いを伝えたいときに、自分の言葉で言い表せるようになると考えた。

特別支援学級では、インタビューをして分かった友達の休日の過ごし方を絵に描く学習を行った。「いつ、どこで、だれが、何を、どうした」といったインタビューのフォーマット(形式)を授業者が示して、インタビューの練習をさせた(図6)。練習するうちに自信をもち、得意気にインタビューをする姿が見られた。授業後半のフリーインタビューでは、フォーマットで示していない内容も質問するなど、聞こうとする意欲を高められた。

3年生の国語では、報告文の学習の導入として、メモのモデル(見本)を見て、その特徴を探る活動を取り入れた(次頁図7)。2種類のモデルの共通点を見付けさせることで、必ずメモを取らなければならない内容があることや報告文で伝えたいことも簡単に書き入れておくことの大切さに気付いた児童が多かった。また、どんな視点でメモを取るとよいか分かったことで、次時の自分のテーマに合わせてメモを取る場面や単元後半の報告文を書く場面で、自信をもって活動する児童の姿が見られた。



図6 インタビューの練習



図7 2種類のメモのモデルを提示

(3) 聞く力の育成
(交流活動後のプラスワン活動)

付け足しタイムの設定

交流活動が活発になっても、児童が何を聞き取っているかが分かりづらい場面があった。そこで、活動の後に色を用いて書き足す機会を取り、児童の聞く力の把握を図った。

国語の説明文の学習では、教科書を読んで分かったことを表したマインドマップを見せ合う交流活動の後に、取り入れたい友達の考えをマインドマップに赤で書き足した。また、算数の図形の学習では、図形の特徴を話し合う交流活動の後に、納得した特徴を自分のノートに赤で書き足した。色を使って書き込むため、児童も授業者も、何をどれくらい聞き取れたかが視覚的に捉えられた(図8)。どの教科の授業にも、簡単に取り入れられる活動で、特に、特徴に気付かせたい学習や考える視点を広げさせたい場面で有効であった。

また、友達が発言した言葉をそのまま書き込めばよいこともあり、習熟の程度に左右されずに、児童がすすんで活動できるよさも感じられた。さらに、「友達の考えを聞いたら自分の考えがもてた」と、聞くことのよさを実感できる児童が増えてきた。



図8 赤で書き足されたマインドマップ

まねをすることの推奨

授業者によるモデルの提示のほかに、児童から発信されたモデルをまねすることで、友達の考えを受け入れる場を工夫した。

2年生の算数では、かけ算のしくみを繰り返し発表する活動を取り入れた。自力解決の様子や児童の性格なども考慮しながら授業者が意図的に指名をしていく(次頁図9)。繰り返して発表をすることは、何度も聞ける場になるため、最初に考えをもてなかった児童が考えをもてるようになり、さらに伝え方が分かるようになって、分かる喜びを味わえる活動になった。

5年生の算数では、ノートを見せ合った後に、友達の考えを写す活動を取り入れた(図10)。自分では思い付かなかった解き方を知

ったり、短時間でたくさんの解き方に触れたりすることができた。さらに、質問をしたり説明をしたりするなど、習熟の差を生かすこともできた。

そして、友達の考えをまねしたり写したりすることで、友達と関わり合いながら、よりよい考えやよりよい表現方法についての理解を深めることにつながられた。



図9 かけ算のしくみを伝える児童



図10 ノートを見せ合う児童

称賛し合う場の設定

児童の伝えたり聞いたりする活動の定着後は、更に活発な交流を目指し、児童同士が評価し合うことを積極的に取り入れた。具体的には、「いいな」と思った友達の意見や考えを称賛し合う活動を行った。

低学年は友達の考えをそのまま発表し、高学年はよいと思った理由を付け加えて発表するなど、発達段階によって工夫した。その際、称賛し合うことが活動の目的とならないように、聞き取るべき内容や事柄を伝えているかどうか、活動の意図を授業者が意識し、称賛

する視点をしっかり提示した。友達からの称賛は、認められたことを実感し、聞き取る内容を吟味しながら、必要な情報を聞き取るようとする意欲を高めた。

自分の考えを見直したり修正したりする場の設定

次に、友達の思いや考えを聞けるようになって、それを自分の学習に生かせないことが課題となった。そこで、交流活動後に、自分の考えを見直したり修正したりする時間を設け、始めに持っていた自分の考えを練り直す活動を通して、考えをより深めたり広めたりできる力を育てたいと考えた。

1年生の道徳では、主人公の心情について、ペアや全体で交流した後に、もう一度個人で考え直す時間を設けた（次頁図11）。

4年生の国語では、筆者がしかけた物語の謎について、グループや全体で交流した後、授業の最初に書いた文を見直しながら、自分が一番おもしろいと感じた部分についての意見文を清書する場を設けた（次頁図12）。

6年生の社会では、ジグソー学習の手法を生かし、最初のグループで話し合われた意見を次のグループに持ち寄って、考えをまとめ直す時間を設けた（次頁図13）。

ここでは、友達との交流で納得したものが、本当に正しいか、自分に合う方法なのか、という意識をもたせ、導入で自力解決した内容をじっくり見直させた。多様な考えを比べてよりよい考えに気付かせる学習、計算や処理のしやすさを検討させる単元、自己決定や決意表明をして、次の学習や生活に生かすきっかけとして有効であった。授業者が、ゆさぶりの発問や違う角度からの見方を投げかけることで、児童は、友達と自分の考えを関連させながら、自分の考えを深めることができた。



図11 主人公の心情をもう一度考える児童



図12 意見文を清書する児童



図13 戦争が起きた理由をまとめ直す児童

4 実践のまとめ

(1) 児童の変容

- ・ハンドサインを示したり、交流の時間になるとすぐに友達に声をかけ始めたりするなど、児童の反応が早くなった。
- ・誰かが話を始めたらしっかり聞く習慣が身

に付いた。

- ・友達の思いや考えを聞くことが楽しいと感じている児童が、9割以上になった。
- ・友達の思いや考えを、自分から聞こうとする児童が増えた。
- ・うなづいて話を聞いたり、友達の考えに付け足しながら話したりする児童の姿が見られるようになってきた。
- ・考えることが困難だった児童も、自分の考えをもてるようになってきた。
- ・交流中に「～さんと同じだった」「～さんの意見はすごい」など、比較したり認めたりできる児童が増えてきた。
- ・称賛やコメントの記入をする活動は、友達と交流しようとする意欲を高め、集中して学ぶ雰囲気づくりにつながった。
- ・自分の考えを見直したり修正したりする経験を重ねたことで、「多くの考えに気付きたい」「難しい方法を試してみたい」と、新たな目標をもてた児童もいた。
- ・集会や友達同士の会話など、生活の場面の聞き方に変化が見られるようになった。

(2) 実践後の教師の声

- ・伝える力や聞く力を伸ばそうという意識で、授業展開を考えるようになった。
- ・ハンドサインはシンプルだが、授業者にとっても児童にとっても分かりやすく、意思表示の有効な手段となった。
- ・交流後に赤で書き足す活動は、交流を通して新しく分かったことを児童が自覚でき、授業者にとってもすぐに把握できるので、その場の個別支援に生かした。

(3) 今後、取り組みたい実践や教師の願い

- ・授業者の指示や発問を精選して、交流後のプラスワン活動を多く取り入れ、児童の聞く力を更に伸ばしていきたい。
- ・聞く力を伝える力に変えたり、伝える力を聞く力に変えたりできるような授業をこれから考えて実践していきたい。
- ・聞く力の伸びを的確に見取るために、評価について再検討を行いたい。
- ・授業中でのよりよい話し方や聞き方を、日常生活へ生かせる工夫をしていきたい。